

2015年1月5日

各位

JXホールディングス株式会社

2015年 会長・社長 年頭挨拶について

本日、当社会長 木村 康および社長 松下 功夫からグループ社員に対して実施した年頭挨拶の要旨につきまして、下記のとおりお知らせいたします。

記

<会長(木村 康)年頭挨拶>

1. 今年の展望・課題

昨年の世界経済は、米国が緩やかに回復しつつある一方で、中国の減速やユーロ圏のインフレ率下落による景気後退懸念、年末に入ってから急激な原油価格の下落による資源国経済の急速な悪化により、非常に不安定であった。2015年も、引き続き資源価格の低迷や新興国経済の成長鈍化など、予断を許さない状況であろう。

わが国経済においては、消費税の増税はあったものの、円安の進行による景況感と消費マインドの改善、有効求人倍率の上昇など緩やかな景気回復がみられ、年末に行われた衆議院選挙の結果でも、安倍政権が当面は安定的に運営される見込みとなった。また、経団連からは元旦に「2030年のあるべき日本の姿を見据えたビジョン」が発表された。

今年、いよいよわが国は、デフレからの完全脱却に向けてアベノミクスの第三の矢である「成長戦略」を着実に実行し、2年後に予定されている消費税増税に耐えられる経済を作っていかなければならない。

当社グループも、今年は「飛躍のスタート」と位置づける第2次中期経営計画(第2次中計)の最終年度に突入するが、厳しい環境が続く中で第2次中計の目標達成に向け正念場を迎えている。また今年も、第3次中期経営計画を策定する年でもあり、2030年に向けた長期ビジョンを固め、「世界有数の総合エネルギー・資源・素材企業グループ」へ向かって邁進していかねばならない。

2. グループ社員への期待

2015年は当社グループにとっての正念場であるが、会社が飛躍し成長するためには、社員各々が危機感を持ちながら常に成長し続けていかなければならない。

これまで、3つの意識(当事者意識、プロ意識、変革意識)を持った業務の遂行を求めてきたが、本年は特に「当事者意識」を心がけてほしい。仕事を自分に与えられた権限や業務の範囲に留めるのではなく、視野を広げてグループ全体の事柄として捉え、時には外部の視点で見つめ直し、ビジネスの拡大や別の角度からのアプローチを図ってほしい。

こうした意識が、当社グループの更なる活性化につながることを期待している。

3. 経営理念・行動指針の浸透

昨年はいくつかの不祥事があったが、グループ発足以来、未だ不祥事を根絶することができていない。

改めて当社グループ社員の一人ひとりが「JXグループ 経営理念・行動指針」を自分の業務に落とし込み、職場の中で十分な話し合いを経て、日々実践してもらいたい。

4. 結び

本年、わが国は2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向かってスタートダッシュを切る年である。様々な変化が予想される年であるが、当社グループも一人ひとりが変化を起し、その力を結集して更なる成長に向けて邁進していこう。

<社長(松下 功夫)年頭挨拶>

1. 昨年を振り返って

昨年は、急激な為替変動、原油安、銅価の下落と消費増税、夏場の天候不順による想定以上の石油製品需要の減少など、エネルギー・資源業界にとって厳しい環境の渦が押し寄せた。

当社グループもその渦に巻き込まれた結果、第2次中期経営計画(第2次中計)の初年度であった2013年度は、目標を大幅に下回る厳しい結果に終わり、2014年度上期以降も厳しい状況に変わりはない。

2. 本年の事業課題

現在、当社グループは、急激な原油安、銅価の下落、想定以上の国内需要の減少など、危機的な状況に置かれている。この現実をグループ全体で共有し、まずは第2次中計の目標達成のため、グループ一丸となって利益にこだわり、あらゆる努力を実践することが必要である。

また、今年は2030年を目指す長期ビジョンと第3次中期経営計画を策定する年でもあり、既存事業の構造改革継続による収益力強化に加え、これまでの戦略投資から確実にリターンを得ていくことが不可欠である。事業別には、

(1) エネルギー事業

当社グループの柱である石油精製販売事業から収益を上げるため、またエネルギーのボーダーレス化が本格化する中で業界の垣根を越えた競争に勝ち残るため、「事業投資の選択と集中のスピードアップ」「エネルギー変換企業への変革」の推進

(2) 石油・天然ガス開発事業

英国での新規開発油田の立ち上げを着実にを行い安定的に操業すること、CO2-EORプロジェクトを推進しつつ、命題である中長期的な生産量・埋蔵量の維持・拡大を念頭に「資産ポートフォリオの再構築」を図り、「投資の選択と集中」を強化し逆風に耐えられる体づくり

(3) 金属事業

当社グループの第2次中計最大のプロジェクトであるカセロネス銅鉱山の銅精鉱がフル生産に移行することで、国内の銅精鉱自給率が約50%に高まり、当社グループの収益に大きく貢献することから、その安全かつ安定的な操業

を着実に図っていく。

3. グループ社員への期待

本年も「日々、チャレンジし、成長する企業グループ」を目指すために、一人ひとりが大きな目標に「チャレンジ」し、お互いを知りあうための「コミュニケーション」をより活発に行ってほしい。

また、グループ全体としての利益を常に意識し、組織の壁を越えた対話が図られることで新たな発想が生まれることを期待したい。

すべての人にとって時間は等しく 有限なものであり、働く社員各自の時間も限られている。その時間を有意義にするためにも、「チャレンジ」と「コミュニケーション」を常に意識しつつ、衝突しながら結果を出し、お互いに切磋琢磨しながら目標に向かって前進してほしい。

4. 結び

本年の干支である未にまつわる諺に、「群羊を駆りて猛虎を攻む」という言葉がある。この諺の如く、厳しい経営環境下でも、グループ全体で力を合わせ、チャレンジ精神をもって業務に取り組みことで、強い推進力を生み出し、第2次中計の最終年度である今年を、当社グループのX(みらい)を力強く切り拓く年にしていこう。

以上